



昔 この国は 深い森に覆われ
そこには太古からの神々が住んでいた

A Long long ago, This country had been covered deep forest, many Gods had inhabited since ancient time.

この作品には、時代劇に通常登場する武士、領主、農民はほとんど顔を出さない。姿を見せても脇の脇である。

主要な主人公群は、歴史の表舞台には姿を見せない人々や、荒ぶる山の神々である。

タタラ者と呼ばれた製鉄集団の、技術者、労務者、鍛冶、砂鉄採り、炭焼。馬借あるいは牛飼いの運送人達。彼等は武装もし、工場制手工業ともいえる独自の組織をつくりあげている。

人間達と対する荒ぶる神々とは、山犬神、猪神、熊の姿で登場する。

物語のかなめとなるシシ神とは、人面と獣の身体、樹木の角を持つまったく空想上の動物である。

主人公の少年は、大和政権に「ほまれ」古代に姿を消したエミシの末裔であり、少女は類似を探すなら縄文期のある種の土偶に似ていなくもない。

主要な舞台は、人を寄せつけぬ深い神々の森と、鉄を作る城砦の如きタタラ場である。

従来の時代劇の舞台である城、町、水田を持つ農村は遠景にすぎない。むしろ、ダムがなく、森が深く、人口のはるかに少い時代の日本の風景、深山幽谷、豊かで清冽な流れ、砂利のない土の細い道、沢山の鳥、獣、虫等純度の高い自然を再現しようとする。

これらの設定の目的は、従来の時代劇の常識、先入観、偏見にしばられず、より自由な人物群を形象するためである。

最近の歴史学、民俗学、考古学によつて、一般に流布されているイメージより、この国はずっと豊かで多様な歴史を持つていた事が判つている。

時代劇の貧しさは、ほとんどが映画の芝居によつて作られたのだ。

この作品が舞台とする室町期は混乱と流動が日常の世界であつた。

南北朝からつづく下克上、バサラの気風、悪党横行。

新しい芸術の混沌の中から、今日の日本が形成されていく時代である。

戦国もののような常備軍が組織戦を行う時代とはちがうし、一所懸命の強烈な鎌倉武士の時代ともちがう。

もっとあいまいな流動期、武士と百姓の区別は定かでない、

女達も職人尽しの絵にあるように、より大らかに自由であつた。

このような時代、人々の生き死にの輪郭ははつきりしていた。

人は生き、人は愛し、憎み、働き、死んでいった。

人生は曖昧ではなかつたのだ。

21世紀の混沌の時代にむかつて、この作品をつくる意味はそこにある。

世界全体の問題を解決しようというのではない。

荒ぶる神々と人間との戦いにハッピーエンドはあり得ないからだ。

しかし、憎悪と殺戮のさ中にあつても、生きるにあたいする事はある。

素晴らしい出会いや美しいものは存在し得る。

憎悪を描くが、それはもっと大切なものがある事を描くためである。

呪縛を描くのは解放の喜びを描くためである。

描くべきは、少年の少女への理解であり、少女が、少年に心を開いていく過程である。

少女は、最後に少年にいうだろう。

「アンタカは好きだ。でも人間を許すことはできない」と。

少年は微笑みながら言うはずだ。

「それでもいい。私と共に生きてくれ」と。

そういう映画を作りたいのである。

A Battle between humans and fierce gods

荒ぶる神々と人間の戦い

この映画の狙い

原作・脚本・監督 宮崎 駿

「『もののけ姫』企画書」より転載

Isn't there a way for both man and forest to live together ?

森と 夕夕ラ場

双方

生きる道はないのか

Are you prepared to stare your own destiny in the eye ?

そなたには
自分の運命を見据える
覚悟があるかい？



みな、よく見とどけよ
神ゴロシが
いかなるものか

いかなるものか

けがらわしい
人間共め

わが苦しみと
憎しみを
知るがいい

Who's afraid of death ?! My life means nothing,
if I can make those bastards pay !!

死などこわいも
人間を追い払う
生命などいらぬ



All of you! Observe to the end!
You will see whether gods can be killed or not !!



You filthy human scum-you'll understand my agony and my hatred !



宮崎駿監督は、一流のアクション・エンタテインメント監督である。宮崎監督に対する「飛行表現作家」「冒険娯楽作家」という評価は、最早定着してしまった感がある。しかし、宮崎監督は単なる娯楽映画監督ではなく、常に現代の政治的・社会的・思想的ムーブメントを作品に反映させている希有の良心的表現者でもあるのだ。

これまで、多くの誌面を飾った宮崎監督作品の評価は、娯楽性の裏に隠れた面倒な思想的意義を分析することを避けたものが圧倒的に多い。それらは主にシーン分析であり、「飛行表現の生理的快感」「人物描写の誠実さ」「エコロジカルで常識的な理性」などの観点から述べられたものであった。中には、生理的・感性的な「好き」「嫌い」を繰り返すだけの貧困な感想文すら少なくなかった。これらの評価は、監督の作家としての思想性に肉薄する観点が欠落している分、著しく皮相的であったと思える。

監督自身はインタビューや対談で多くの書物を紹介し、政治的・思想的発言も行っているが、これらの内容に関して、詳しく突っ込んだ考察や論考を行った例はほとんどない。つまり、宮崎監督自身の問題意識に関する正確な評価は未だ棚上げ状態なのである。

宮崎監督は、これまで前監督作『紅の豚』を「作ってはいけないモラトリアム映画だった」と自戒し、「次作で決着をつけねばならない」と度々語って来た。「監督引退」の噂についても、本意は「積年の課題に決着をつける」ことであったのだ。筆者の取材では、「これを作れば、当分楽しい趣味の作品を作って暮らせる」とまで語っていた。おそらく、今回は宮崎監督の生涯の中で、最も苦しい作品制作であった筈だ。

では、宮崎監督は、何故それほどまでに重い宿題を自身とスタジオジブリに課したのか。「決着」とは何を意味するのか。

本論では、映画『もののけ姫』に込められた膨大な情報を、多角的な観点から整理することで宮崎監督の思想的意図をあぶり出してみたい。前例のない実験的論考ではあるが、はるか彼方を走り続ける宮崎監督の問題意識の片鱗にでも迫ることが出来ていれば幸いである。

(なお、本文に引用した宮崎監督の発言で、出典記述のないものは、筆者が直接監督に伺ったものである。)

「もののけ姫」を読み解く。

Understanding [Princess Mononoke] ~The Untold Story~

語られなかった物語

TEXT	叶 精二 (高畑・宮崎作品研究所)
------	-----------------------------

おかだえみこ / 池田憲章 /
中島伸介 / 野口文雄
構成 / 才谷遼 /
三好寛・今秀生 (COMIC BOX編集部)

図版協力 / 宮崎駿 / スタジオジブリ・カンパニー (田中千義 / 川端俊之 / 米沢敬博)

もののけ姫 相関図

文責：COMIC BOX

エミシの村



カヤ

村の娘。冒頭タタリ神となったナゴの守に襲われる所をアシタカに救われる。旅立つアシタカに黒曜石の玉の小刀をお守りに渡す。



じいじと村の長たち

エミシの隠れ里の指導者達。特にじいじは、アシタカのお守り役的存在か？



ヒイさま

エミシの隠れ里の老巫女。石や木片などで吉凶を占う。



アシタカ&ヤックル

- 500有余年前に大和王朝との戦いに破れて滅んだエミシの末裔。
- タタリ神の呪いを解く方法を求めて西へ向かい、サンやエボシなど一族以外の人間に初めて接する。ヤックルは架空の動物だが、アシタカのパートナーとしていじらしいまでの忠誠をみせる。



エボシ御前

深山の麓で、大勢の社会からはみだした者たちで営むタタラ場を指揮し、火を絶やさぬために森を切り開かんと、森の神々と対立している。タタラ場の者たちには慕われているが素性は謎。シシ神の首も狙っている。



ゴンザ

エボシの部下で、牛引き、ワラツ達の頭目。



甲六

おトキの夫で、牛飼いの一人。犬神に襲われ、けがをしたところを旅してきたアシタカに救われる。



おトキ

タタラ踏みの一員で、女達のリーダー的存在。甲六の妻。



牛飼い

エボシの部下で、牛で荷を運ぶ者達。タタラ場に食料や生活用品を運搬する、補給隊の役割を果たしている。これを断ち切ろうとするサンたちとの攻防で、多くの犠牲者が出ている。



タタラ踏みの女

ここでは通常と違い、本来なら女人禁制のタタラ場で女性が働いている。エボシはそうすることによって男女平等という雰囲気を作り出している。



アサノ公方

エボシ御前を支配下に置いてタタラ場の製鉄を50:50で献上させようとしているこの地の武将。

病者(鍛冶、鑄師)

エボシによって鍛冶や鑄師の仕事を与えられ、働いている。石火矢の研究などもしている。

ナゴの守(タタリ神)

エボシ御前に撃たれ、呪を集めてタタリ神になった大猪神。はるかエミシの村まで渡り、アシタカにその呪いを授けて死ぬ。



モロの子供達

サンを背にして駆け巡り、人間と闘う。



モロの君

サンや二匹の犬神の母親である。二本の尾を持つ300歳の犬神。森を侵すエボシ御前を殺す機会を狙っている。

サン

モロを恐れる人間から、いけにえとしてさげすまれ、モロの娘として育てられる。当然人間を憎み、エボシ達に「もののけ姫」と恐れられる。アシタカと出会い、心を通わせるようになるが、それでも森で生きていくことを選ぶ。



乙事主

500歳の鎮西(九州)の老猪。人間に、他の猪神を率いて無理を承知の大攻勢を仕掛けるために旅してくる。



しんじろ 狸々

日本猿より大型の霊長類。伐採された後に木の種を植え、森の再生をする役目をシシ神から与えられている。森の中の立場は弱い。

コダマ

森の大樹から生まれる精霊。カタカタと首をふりシシ神を呼ぶ。



シシ神の森

シシ神

森に生きる全ての生命に対して奪取と授与を行う神獣。月の満ち欠けと共に誕生と死を繰り返す。その首には不老不死の力があると信じられている。夜になると、デイダラボッチに変身する。



ジコ坊

アシタカにシシ神の森のことを示唆する謎の坊主。バックには、謎の組織「師匠連」があり、エボシ御前に石火矢衆を貸し与えてシシ神の首を狙っている。



狩人・ジバシリ

ジコ坊が集めてきた腕の立つ狩人。ジバシリも基本的には同じで、けもの皮を被って地を走るためにそう呼ばれる。

石火矢衆

師匠連の持つ武装集団。

師匠連

何らかの利害関係によりシシ神を狙う高僧の集団。

天朝

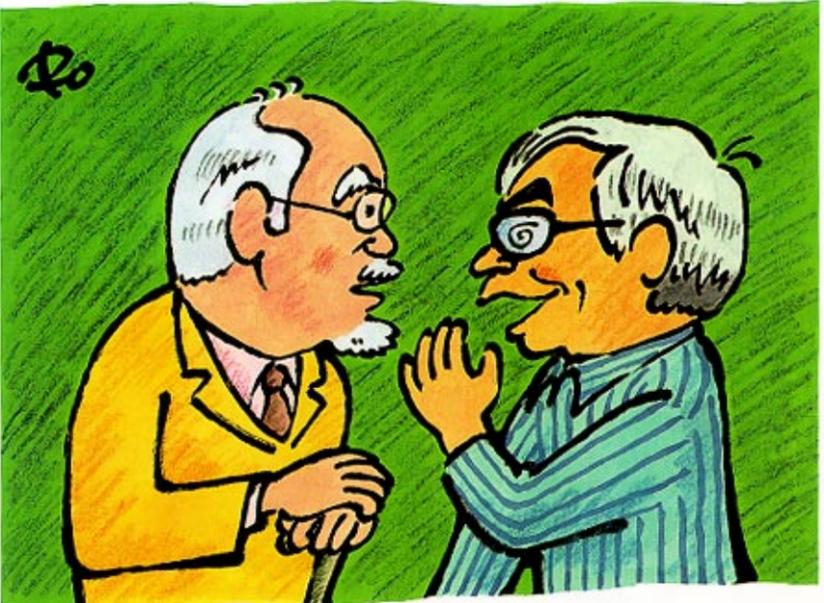
謎の組織「師匠連」を使って、不老不死の力を持つというシシ神の首を手に入れようとしている。

唐笠連

恐らく唐から渡ってきたと思われる戦闘集団。

タタラ場

もののけ姫 声優紹介



…それは、アニメ「白蛇伝」から始まった。

絵/片山雅博

<h3>サン</h3>  <p>1969年10月3日、東京出身。 '87デビュー以来多くのCMやTVドラマに出演、映画では「3-4×10月」(北野武・'90)でヒロイン役が注目される。女優の石田ひかりは実妹。 今回のサンのは、自身が熱烈な宮崎作品のファンということもあり、「平成狸合戦ぽんぽこ」(高畑勲・'94)おきヨ役に続いてのジブリ作品で出演である。 「サンは、自分の大切なものを守りぬく強さをもつ、本当に格好いい女の子。気持ちの持ち方次第では、誰の心にもいると言えるでしょう。サンを演じるということは、それを自分の心から引っ張り出す難しい作業でしたが、最後までやり抜くことができ本当に嬉しいです。」</p>	<h3>石田ゆり子</h3> 	<h3>アシタカ</h3>  <p>1967年10月19日、東京出身。 5才でテレビ「母の鈴」でデビュー。大人の俳優顔負けの演技が評判を呼び以来名子役として多数の作品に出演。85年、ニール・サイモン作「ブライTON回顧録」で本格的舞台デビュー。子役から舞台俳優へと着実に歩んでいる。「風の谷のナウシカ」(宮崎駿・'84)ではアスベル役を演じた。映画界にも進出して「ドグラマグラ」(はるかノスタルジイ)にも出演。 「多くの人が楽しめる宮崎作品に「風の谷のナウシカ」以来13年ぶりに参加できて、うれしくて興奮しました。実写映画でも大人から子供まで楽しめる作品はそうないですよね。でも、言葉も行動も真っ直ぐなアシタカを演じるのは、本当に大変でした。苦しい状況のなかで彼がどのように行動してゆくのか、どうぞ注目してください。」</p>	<h3>松田洋治</h3> 
<h3>ジコ坊</h3>  <p>1951年生まれ。 唐十郎主宰の伝説のアンゲラ劇団「状況劇場」出身。TVでは「峠の群像」や「ふぞろいの林檎たち」など出演多数。特に向田邦子作品にはかかせない存在になる。またJRAのCMに出演して強い印象を残している。「それから」(森田芳光・'85)「ウタマギリ」(高嶺剛・'89)「お墓と離婚」(岩松了・'93)など映画でも活躍している。 「宮崎アニメに対しては、実写よりもはるかに面白いという印象があり、一度挑戦したいと思っていました。ジコ坊は特にキャラクターが面白い。表情はコロコロ変わるし、愛敬がある。最後までやっぱり生き残っているしね。愛せる感じがしました。アフレコは初めてでしたが、今回の仕事を通じて、自分の知らない一面を発見させてもらいました。」</p>	<h3>小林 薫</h3> 	<h3>エボシ御前</h3>  <p>NHK連続テレビ小説「マー姉ちゃん」でデビュー。以降TVだけでなく舞台、映画と常に第一線で活躍中。映画では「ええじゃないか」(今村昌平・'80)「天城越え」(三村晴彦・'88)「力が太く大いに泣く」(鈴木清順・'84)「虹をつかむ男」(山田洋次・'96)など多数。 「エボシ御前は、森の大きな自然を象徴する山犬と敵対する役です。演じていて一番難しかったのは、凛々しさの中の迷いや憂いを表現するため、作り声になってしまふことでした。日本の匂いが強いこの作品を通じて、人間がどんどん忘れて置き去りにしてきたものを見つけました。宮崎作品へ参加できる嬉しさから声の出演を引き受けましたが、やり終えた今の方がずっと嬉しさが大きい。」</p>	<h3>田中裕子</h3> 

ヒイさま



京都出身。
1935年に嵐寛寿郎のすすめにより映画界に入り「春霞八百屋町」(マキノ正博)でデビュー。歌手として東海林太郎、松平晃氏らと中国や南方へ慰問にまわる。終戦後「エンタツの迷探偵」(NHKラジオ)で復帰する。劇作家で名演出家の菊田一夫に見出されて上京、数々の名舞台に挑む。舞台での代表作は「放浪記」(芸術祭文部大臣賞)「おもろい女」(芸術祭大賞)等多数。特に「放浪記」の林芙美子役はライフワークとして名高い!テレビでは「3時のあなた」の司会から、「時間ですよ」などその庶民的な人柄が万人に愛された。「アニメのアフレコは初めてですが、新しいものに挑戦することが大好きなので、このお話にはすぐに飛びつきました」

乙事主



1913年、大阪出身。
東宝新劇団、古川ロッパ一座、NHKのアナウンサーを経て新宿ムーランルージュに参加。その後、映画界へ進出。「夫婦善哉」(豊田四郎)「猫と庄造と二人の女」(豊田四郎)「駅前」シリーズ('58~'69)や「社長」シリーズ('56~'71)で喜劇俳優として不動の人気を得る。TVでも「七人の孫」「たいこんの花」等数々の番組に主演。ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」のデヴィエ役は当たり役となり昭和42年から900回務めた。
「最近の映画はくだらない作品が多いが、この作品は最高。せいぜい面白くやりましたよ」

ゴンザ



上條恒彦



1940年3月、長野県出身。
歌手としてデビューし、'71年には「出発の歌」で世界歌謡祭グランプリを受賞。以降、TV「木枯し紋次郎」(市川崑他)の主題歌「だれかが風の中で」寅さんシリーズ「寅次郎守歌」(山田洋次)等を経て現在に至る。宮崎作品では「紅の豚」の空賊マンマユート・ボス役について2作目。最近では、「ラ・マンチャの男」「屋根の上のバイオリン弾き」等の舞台での名演技や、NHK大河ドラマ「秀吉」等がある。八ヶ岳山麓に住んでいる。

モロの君



美輪明宏



1935年、長崎県出身。
シャンソン、タンゴ、ラテン、ジャズを歌い、'57年「メケメケ」の大ヒットで衝撃的に世の中に知られる。日本におけるシンガー・ソング・ライターの元祖として「ヨイトマケの唄」他数々の歌を作ってきた。舞台では三島由紀夫、寺山修司との交流から生まれた「黒蜥蜴」「毛皮のマリー」が大成功を収めた。
「宮崎監督が求めるモロの心理描写は、母性、残忍さ、諦観しているところなど多重構造になっており、演じ分けるのが大変でした。難しい役柄の注文に、一瞬宮崎監督に対し殺意を抱きました。」

トキ



島本須美



12月8日、高知県出身。
演劇畑からこの世界に入る。アニメデビューは「タイムボカンシリーズ ゼンダマン」のイブ。宮崎作品では常連と言ってもさしつかえないだろう。「ルパン三世 カリオストロの城」のクラリス、TV版「ルパン三世 さらば愛しきルパンよ」の小山田マキ、「風の谷のナウシカ」のナウシカ、「となりのトトロ」のおかあさん役に続いて五作品目。ジブリ関連では「海がきこえる」にも出演。方言指導までしている。今回の「もののけ姫」では、豪華な異色声優陣の中であって、おトキはその存在感を大きく示した。

甲六



西村雅彦

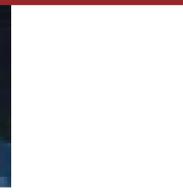


1960年12月12日、富山県出身。
三谷幸喜率いる劇団「東京サンシャインボーイズ」で、1987年の「まさか!先生の愛と冒険」から1994年「麗」まですべての公演に出演。1996年には近藤芳正との二人芝居「笑の大学」で第4回読売演劇大賞最優秀作品賞を受賞。テレビでは「古畑任三郎」や「王様のレストラン」大河ドラマ「秀吉」でその超個性的な存在感をアピールし、お茶の間の人気者になる。映画では伊丹十三監督「マルタイの女」が控えている。
「甲六はつくづくいい奴で、演じていて心が洗われるようでした。甲六ありがとう!僕の心の中に、ずっと甲六はいるよ!」

牛飼い



名古屋 章



1930年12月8日、東京出身。
1949年にNHK東京放送劇団養成所に入所。文学座、劇団雲を経て現在に至る。映画では「天国と地獄」(黒沢明・'63)「駅STATION」(降旗康男・'81)「麻雀放浪記」(和田誠・'84)等出演作も多し。映画のみならずナレーターや舞台でも活躍。最近ではTV人形劇「ひょっこりひょうたん島」のドン・ガバチョ大統領の声の出演が異色だった。今後は映画「マルタイの女」(伊丹十三)や新国立劇場12月公演「夜明け前」が控えている。

タタリ神



佐藤 允



1934年3月18日、佐賀県出身。
1959年、谷口千吉監督「不良少年」で映画デビュー。その後「独立愚連隊」(岡本喜八・'59)「戦国野郎」(岡本喜八・'63)「みな殺しの霊歌」(加藤泰・'68)等多数の作品に出演。その独特の個性と演技は、日本映画の黄金時代を支えた。今年のカンヌ映画祭で大賞を受賞した「うなぎ」(今村昌平)にも出演している。今回のタタリ神役はご本人の指名だとか。